

曾野綾子

リオ・グランデ



集英社文庫



集英社文庫

リオ・グランデ

0193 750007-3041

昭和52年 5 月30日 第1刷

定価はカバーに表示
しております

著 者 曾 野 綾 子

発行者 堀 内 末 男

発行所 株式 集 英 社
会社

東京都千代田区一ツ橋 2 5 - 10

〒101

電話 東京 (230) 6361 (編集)

(230) 6171 (販売)

印 刷 凸版印刷株式会社

著者と了解のうえ検印を廃します (落丁本・乱丁本はおとりかえします)

© A. Sono 1977

Printed in Japan

集英社文庫

リオ・グランデ

曾野綾子

集英社版

第一章 リオ・グランデ

一

二見周造^{ふたみしゅうぞう}が空港に着いた時、サンタ・クルス市のターミナル・ビルの灯はまだあかあかと輝いていた。彼は駐車場を探し、運転台を下りる時、ちらりと自分の足許を見て、はいている黒靴がきれいに磨かれているのに満足を感じた。足許のコンクリートの舗装の上には小さな水溜りがある。雨の水たまりではない、撒水車がまいて行つた水にちがいがなかった。水溜りはほの白く夜が明けかかっていることを示していた。しかし頭上にはまだ星があった。赤道に近い空にはりついたボタンのような星であった。しかし感激することはない。星は星である。

二見は念入りに空っぽの車に鍵をかけてから、だだっぴろい駐車場を横切つた。明け方の空気は首筋にひややかである。空港の建物の中に一步入ると、二見はむっとするような空気に人臭さを感じた。パジャマを着ただけの五つ位の子供が歩きまわっていた。これは通過客のアメリカ人に違いなかった。

二見はすぐに、片隅のソファに手もちぶさたな恰好で坐っている二人の日本人を見つけ出した。

総領事の命令で送りに来ている副領事の依田^{よだ}とし新聞の記者香椎^{かしい}の二人である。

「いやあ、えらくおくれましたな。お眠いでしょう。これほど遅れるとわかっていたら、ホテルをひきあげて、私の家のほうにでも来て休んで頂けばよかったですな」

二見の声に、香椎も、そして依田もしぶしぶ立ち上った。

「わざわざ、こんな早朝にお見送り頂きまして、これは恐縮です」

「いや、最近はとみに朝早く目がさめるようになりましてね。年が年ですから。それでふと思いついて航空会社に見てみると、果して一時間以上おくられるというじゃありませんか。それなら丁度目が覚めたところだから、朝の散歩、と思ってお見送りに来たんですよ。コーヒーでもいかがです」

「今、食堂から帰って来たところなんです」

依田は穏かではあったが、二見に言い返すように言った。そんな気のきかないことはしていませんよ、という調子だったので、二見はやむなく香椎の隣のレザー張りの長椅子に腰を下ろした。「とにかくこの国の飛行機会社はひどいですよ。ひとを待たせることは当たり前だと思ってるんですから。第一、時間通りにいっても、ここを通るのは毎日、午前二時半なんですからね」

二見は、レザー張りの椅子の冷たさをどこか心の片隅で期待しながら手でさわってみたのに、それは冷たいどころではなく、何となくべとべとと生ぬるかった。そこに誰かが坐っていた、というわけではなく、こちらがだまされているように、その椅子は一年中生温いのであった。

「依田さんにも、もうお帰り頂くようにさっきから言っているんです」

香椎は、新聞記者らしく事務的で、しかもよく気がつく性格のようにみえた。

「刪れてますから、私は一向に平気です」

依田は言った。

「それに今、涼しくて、一日中で一番いい時間ですからね」

二見は受けてから、

「第一、途中で帰ったりしたら、総領事が御機嫌悪いですよ。総領事は何といいますかなあ、私なんぞもシャッポをぬぎなくなるほどの完璧主義者でしてね」

依田は黙っていた。

「おかげで、大変よく便宜をはかって頂きました」

香椎は言った。依田が無表情に煙草をつけた時、売子のいない売店の傍のジューク・ボックスがやけっぱちのようにやかましく鳴り始めた。

「土着の音楽はあまりやらないんですね。アート・ブレーキーじゃないですか」

香椎が言った。

「ほほう、そうですね。そう言えばそうだな」

二見は言ったが、彼は決してアート・ブレーキーに詳しいわけではなかった。

「日本人が民謡なんかあまりきかないのと同じですね」

香椎は言った。

「機械がアメリカからの輸入ものですからね」

二見は依田の言うことに同調して頷いたが、心の中ではまったく依田の愚かさにうんざりせずにはいられないような気持ちだった。この気の小さい現地やといで役人になった男は、いつも当り前のことしか言わないのであった。

「しかし、もう一週間？ 十日ですか。十日で日本ですな。羨しいです」
うらやま

二見はもう一度、搭乗口からみえる空を見た。空はさっきと比べるとますます淡く、クリーム色がかっていた。

「羽田から銀座裏に直行して飲み明かしましてね、翌朝、ちゃんと社に出ていたという猛者もいますが、僕らはいけません」

「いいですなあ、日本の……」

と二見は言いかけたが、日本の何がいいのかよくわからなかった。

「二見さんも、そろそろ帰られるでしょう」

香椎が言った。

「その気配はないですか」

「本省へ行ってそんなことをおっしゃってごらんさい、『二見？ ああ、あいつはフィデリダでまだ生きてますかね』ってのが関の山でしょうな」

二見は声をあげて笑った。この卑屈な笑いには、大ていの相手がどぎまぎするので二見は面白く思うのであった。

「言葉の関係もありますね。英語だといくらも代りの人があるんです。しかしスペイン語となる

とね」

依田が言った。

「そうそう。その意味で、私は仕事に満足しとりますよ。何しろ移民の方たちのための仕事ですからね」

二見は依田の意見に賛成してみせながら言った。この現地やといの男は、南米のウルグアイ生まれである。高専ぐらいを日本ででたらしいけれど、生まれた国の言葉が喋れるのは当り前のことであつた。それなのに、彼は何かしら特別に高級な技能かなんぞのようにそれを吹聴するのであつた。

その時、アナウンスがあつた。

「とびますね」

スペイン語など大してわからない筈の香椎が真先に言った。

「よかつたです」

依田もいそいそと立ち上つた。この男は、もう体全体が眠そうだった。

「もうこれで、いよいよ、こういう文化果つる国とも縁が切れますな」

二見は愛想よく言った。

「そんなことはありません。実に楽しかつたです」

「それはそうですね。日本へ帰つて、自分のうちに落ちついてみると、旅行中ひどい目にあつた所のほうが妙に懐しいそうですからな。もつとも、それは、ここで生水をのみましてね、アメー

バ赤痢にかかって入院なんぞして、一月ばかりひどい目に会って帰った男の話ですが」

「ま、それはそうでしょうね。強烈な印象という点ではそれに違いないですから」

三人は柵のところまで来た。

「ではお元気で」

二見はまず香椎と握手した。そしてこのまぎれもない日本人の悪気わるきのない手を感じた時、二見は少しばかり感傷的になった。二見の頭の上には、この国の大統領のホセ・マリア・カルドーソの軍服姿の写真があつて、にこりともせずはこちらをみているようだった。

香椎が飛行機のほうに向つて歩き出す時、その姿は、もう黒白写真ではなく、ちゃんとした色彩写真とみえるほどに、夜はあけかかっていた。

依田と二見は、お互いにむつり黙りこくつたまま、戸外の柵の前で、目にみえぬ相手に最後の形式だけの尊敬を払うために立っていた。空気には早くも日中のだらけた暑さの匂いのようなものがまざり始めていた。それは野卑な暑さであり、飛行機に乗って行く人間は何か非常に利口でまじな事をしていて、とり残された連中はどれもこれも阿呆面をしているように、普段の二見なら思うところだった。

しかし、今日、彼は一種独特の爽やかさと自虐的な解放感を二つながら味わっていた。

飛行機がプロペラをまわし始めた時（一九六×年の夏現在、民間航空のジェット機はまだこの路線にまわされていない）彼は依田に機嫌よく言った。

「これでまあ、無事に終りましたな」

依田は「そうですね」と答えたが、明らかに二見の言葉を不愉快に思っている様子だった。彼はただ、それに対して、二見が年上であり、その上、役所の俸給を比べてみても明らかに二見のほうが上であるというだけの理由で、辛うじて黙っているにすぎない、という印象を見せつけていた。何故なら五日間、香椎の世話をしたのは主に自分であり、一度ばかり夕飯によび、半日そこらへんをちよつと案内しただけの二見が、「無事に終りましたな」などという感慨を抱くのは僭越だ、という表情が見えすいていた。

二見にはそれが又愉快でたまらなかった。この男は、間もなく日本から送られて来たし新聞で、あの新聞記者の書いた記事の中に、フィデリダの日本移民は必ずしも成功していないという内容を読み、さぞかし憤慨することだろう。《あんなにつきつきりで世話してやったのに、あの恩知らず奴が！》と依田は考えるに違いないのである。二見はそれを思うと、背中がうずうずした。どんなに懐柔しようとしても、このフィデリダ共和国内の日本移民の状態を、完全に満足すべきものと書いてくれる新聞記者があるわけではない。

ただ、新聞記者や作家などという口ばかり達者な連中の来訪が、あまり好ましくないという点では、フィデリダ共和国、サンタ・クルス市の日本総領事館副領事依田一昭（なづな）も、開発省移民局移民調整官二見周造も恐らく同じであるに違いなかった。二見はそれを相手に言いたかったが、それはどう考えても依田の意をことさらに迎えるような結果になるのでやめてしまった。

「五日や六日、そのへんをちよろちよろ歩いただけで、何が書けるんですかね」

依田は二見に言った。この男も又、今日日本に帰って行く新聞記者に対して漠然とした不安を感じ

じているらしいと思うと、二見は急に同志的な親しさのようなものまで感じそうになった。しかし彼はポケットからハンカチをとり出して、早くもじっとりと浮き始めた額の汗をふきながら言った。

「何しろ、書くことが商売の人ですからね。何かは書くでしょう」

飛行機の爆音にまけないように、二見は大声で答えた。

「しかし真実を書いてほしいですからね、こちらとしては」

「それはそうですも」

二見はおかしさをこらえて賛成の意を表した。依田は本当に、新聞記者に真実を知りたいと思っているのだろうか。それに、真実とは又、何という、大それた言葉だろう。真実とは、神さんか仏さんだけがご存じのことだ。同じ土地に百年生きていたとしても、その男がその土地の真実を知っているとは限らない。二見は今、依田が自分だけは真実を知っていると信じこんでいるらしいことがおかしくてたまらなかった。別の日本人に尋ねたら、彼は又、依田とはちがったフイデリダの真実を自分こそ話すことができるというだろう。

何もかもが本当は幻影であり、同時にその当人にとってだけ真実なのだ、といおうとして二見は思いとどまった。二見は、今、日本式の物の考え方でこの土地の現実をわり切ろうとする一人の旅行者を内地へ追っばらったところなのであった。そして彼は爽快な気分であった。しかし二見は香椎に、ここで自分の仕事の都合のいいことを見てもらおうとか、見せてやろう、とかいふ気はおきなかった。逆に、二見は総領事館がかくしておきたがっている現状をすっぱぬいた。い

ずれ、何かフィデリダ移民と日本の出先官僚に関するろくでもない記事が新聞に出ることになるだろう。矢は既に放たれたのだ。しかしとにかく香椎という、異質の存在がなくなつて、このフィデリダの空気が本来の怠惰なものに帰るのが彼は何より嬉しかったのだ。

十分後に二見は、自分と依田に対する共通の^{いたわ}労りをこめて依田の肩を抱きながら、ターミナル・ビルを出た。

「勿論、車は待たせておありでしょう」

二見は言つた。

「総領事的車で来ましたから」

車は鼻先に、日の丸をたてるようになってゐる総領事のクライスラーであつた。勿論、本人が乗っていないので、今、その国旗は巻かれて上に黒い覆いがかぶせられていたが、それだけで車にはある種の威厳がそなわつていた。

二見は依田がクライスラーにのりこむのをわざといんぎんに見送つてから、自分の乗つて来た小型のドイツ車のところへ戻つた。

水溜りは早くも乾いていて、星はもうそのあとかたすらなかった。

二

二見は目下のところ、中央広場に近い最新式の十四階だてのアパートの、十階のフラットに息子と、日系人の女中と暮らしていた。寝室は、使用人室をのぞいて三つあり、他に居間と食堂が

あった。アパートの外壁は桃色に塗られた上にさらに所々、緑や白のタイルで飾られているといふかなり俗っぽい代物だったが、中の様式はそれほど悪趣味でもなかった。何より冷房が完全なのは有難かった。しかしそこから眺められる景色は、お世辞にもいいとは言えなかった。

アパートのすぐ下は中央広場で、そこには年がら年中、西瓜や、蜜蜂のたかった輪切りのパイナップルや、シロップを入れた氷水を売る屋台をひいた商人と、仕事にあぶれた男たちが、白い歯をむいて笑ったり、地面にねころんだりしてたむろしている。そこにはあくどい臭気が溜っていて、旅行者などは思わずハンカチで鼻をおおいたくなるらしかった。地面には西瓜の食いかげや種が散らばっていて、その種と蠅とは、とうてい見わけがつかなかった。

その上にさらにうつつとうしいのは、アパートの真下にあるマンゴーの老樹の並木だった。なぜ、椰子を植えないのだ、と二見は思った。二見はあの帝王椰子の毅然とした風格が好きだった。しかしマンゴーときたら実が熟して落ちる頃には、広場の臭気はさらに渾然としたものになるのである。

わずかにその繁みの間から見える白い建物が、うつつとうしい景色に一応のしまりを与えていた。それがこの市で第一のホテルといわれるコンティネンタルであった。入口には小さなネオン・サインの看板があり、赤で「エル・ランチョ」、青で「カプリ」という文字が交互に浮ぶようになっている。エル・ランチョは酒場の名で、カプリは食堂であった。

このネオン・サインが一際輝いてみえる夜はまだよかった。空気は冷えて多少まともになり、星が空にぶら下っていてあたりは何もみえなかった。ネオン・サインの下に、娼婦らしい黒髪の

胸の大きい女が立っているのがみえる時もあった。

しかし、同じ光景が、この昼間の白っぽい陽の中では、言いようもなくだらけてみえた。コンティネンタルの屋根の上には、この国の政府が保護鳥に指定している禿鷹がとまっていた。そして森のような、濃い緑の間を点綴する白っぽい建物や鮮かな煉瓦色の屋根瓦や教会の塔の向う、どの方角に視線をのばしても、それは一定のところまで来るとくつきりとどぎれて、もやとも光ともつかぬぼうようとした空間に消えている。

その空間こそ、リオ・グランデ河の正体であった。合衆国とメキシコの国境を流れる有名なリオ・グランデ・デル・ノルテではない。フィデリダ島の大河という意味のリオ・グランデである。この大河は日本人の考える河の概念とは凡そかけはなれたものであった。それは泥色の水を、ぬらぬらと陽に光らせる途方もない水の壁であった。

壁。それは嘘ではない。二見は七年前初めてここへ来た時、ある町角に立って、すぐそこに茶色い高い壁か塀のようなものが立ちふさがっているのを見た。それは強いて言えば、学校か兵營か刑務所の塀に似ていた。しかしその塀は小さいさぎ波をたてながら生き物のように光っているのだけが違った。

それがリオ・グランデであった。倉庫の向うにも、水上警察の粗末な小屋の裏庭にも、墓地の背景にも、時々思いがけぬところにこの壁は立ちはだかつて見えた。そしてこの泥色の水は、河口のプエルト・コルテスまで、まだ、百キロもこうしてあきることなく続いているのであった。

その朝二見がアパートの窓から見た風景も又、何ら變つてはいなかった。ホテルのネオンは消え、娼婦の姿もはやなかった。気温は次第にのぼり始めているのが陽ざしの強さでわかった。

二見の一日はまずシャワーを浴びることから始つた。冷房がきいていても水道からでくる水は適当なぬるま湯である。そしてその水は色がついていた。あるかなきかのリオ・グランデ色と二見は呼んでいた。この町の人間は白いシャツを着ているつもりでいて、実は少しばかり泥水にそまつたものを身につけているわけであつた。町中の白さに対する観念がすでに狂っているのだから、それは大した問題ではなかった。ただ、時々高い関税のかけられているアメリカ煙草を吸う時だけ、二見はその煙草の紙の白さに感動した。そのような白さが、サンタ・クルスの町にはなかなか見当らなかった。そしてその感動を味わい、自分の感覚の狂いを少しでも修正するためだけに、彼は時々大しておいしいとも思えないアメリカ煙草を買うのであつた。

彼がシャワーを浴び終つた時、居間の方で電話のベルが鳴つた。日本人のフィデリダ二世の女中が出て、日本の総領事からの電話だと浴室の外でどなつた。

香椎の乗つた飛行機が落ちたに違いない、と二見は何故ともなく思った。この国の連中は、飛行機事故に対する本能的な恐怖心に欠けていた。そして飛行機は下らない理由のために平気で落ちるのであつた。管制官が勤務中に女友達と喋つていて注意がおろそかになったとか、整備員がボルトを一本しめ忘れたとか、というようなことである。葬式は教会で華やかに行われるが、関係者は大いの場合逃亡した後で、原因も責任もつきとめようがなかった。

「二見です、お早うございます」

バスローブを引っかけただけの姿で、二見は受話器をとりあげた。

「志沢ですがね」

二見は顔をしかめた。彼は志沢総領事のこの勿体ぶったものの言い方が嫌いだった。

「早くからさわがせましたが、あなたが家を出ないうちにとまってね。香椎さんはたっただけだね」

「はあ」

「実は彼のチャーターした飛行機代が、総領事館へ請求されて来ているけど、あれは困るよ」

「は？」

「彼が払わないと言ったのかね。飛行クラブのほうでは、あんたがこっちへもって行けと言ったと言っているんだ」

皮肉な調子が続いて、二見は総領事の亀のようなつるりとした顔を目に浮べた。

「総領事がお払いになるのかと思いますので。万事そちらで接待なさるからおっしゃったので、移住協会の稲垣君も私ももうっかりさしでがましいことをしてもなにかと……」

「そりゃ、便宜は計りますよ。しかし、金のことは、あなた、向うは仕事で来たんだから取材費用を出すのは当然だろう」

「はあ」

二見は考えるふりをしてから、

「どうぞ致しましょう」